

『ドラマ』

著:朝丘 戻

ill:麻生ミツ晃

「おもしろい？」

あ。

ドラマに集中していた俺に、恵裕次本人が話しかけてきた。

「ご、ごめんなさいっ」

慌(あわ)ててテレビを消すと、彼は「べつに消すことないのに」と苦笑して、ジュースの入ったグラスを片手に近づいてくる。

「このあとふたりの初めての濃厚なキスシーンだったんだよ」

俺の前にグラスをおいて、恵さんが横に座った。小首を傾(かし)げてにっこり笑い、いたずらっぽく肩を竦める。

俺はなんだか奇妙な気分になって、顔をしかめてしまった。だって、いまテレビのなかにいた人が目の前にいて、あのアイドルとキスしたのが、この唇……。

恵さんは俺の心情をどう解釈したのか、

「まあ、拓人とはこれから何度もキスするわけだし、いいか」

なんて言う。今度は飛びあがって、身構えてしまった。

「あの……恵さんは平気なんですか、相手が男で」

「ん？」

「なんで、その……ドラマの恋人役に、俺を指名したんですか」

恵さんは焦(あせ)るでもとぼけるでもなく、しれっとこたえる。

「キミの顔が好きだったから」

俺はたっぷり数十秒かたまってしまった。

「か……顔が、って……失礼ですけど、恵さんて、男好きなんですか？」

「あはは、違うよ。俺は結婚してるしね？」

「別居中みたいですけどね……」

じろ、と見返してきた恵さん。俺は視線をつうとそっぽに流す。

ぎこちない沈黙を、恵さんの咳(せき)払いが、ゴホン、と打ち消した。

「……なるほどね。拓人がきた理由がわかったよ。同性愛のドラマにどうして俺が出演することを決めたのか、キミを指名したのか、理解できなかったんだね」

俺が無言で頷くと、恵さんはテーブルのうえにあった煙草(たばこ)をとって火をつける。なに気ない仕草なのに、その指先のかたちと繊細な動きに惹(ひ)かれて、思わず息を呑(の)んだ。

テレビや雑誌で見ていた恵さんの鋭い目元がすうっと細くなり、長い睫(まつ)毛(げ)が空気を撫(な)でる。……こんなきっかけがなければ、この人とこうしてふたりで話すこともなかった。

見惚れていたら、お互いの視線が音もなく重なって絡み合った。あ、と意識して俺が俯いた拍子に、彼の唇から苦笑が洩れる。

「俺はどんな役でも嫌だとは思わないよ。演じることで役の人間の心を探究できるの

が、この仕事の楽しさだと思ってるからね。変な役なら尚更楽しい。自分と似てる役のほうか、おもしろくないかもしれないな」

「演じる、楽しさ……？」

「拓人は役柄が“ゲイだから無理”としか考えてなかったんじゃないか？」

刹(せつ)那(な)、冷たい戦(せん)慄(りつ)が走った。凶星だ。恵さんの言うとおりに、俺は単純にゲイを毛嫌いしていただけで、それ以上でも以下でもなかった。

くちごもる俺を一瞥して、恵さんは煙草の煙をやんわり吐く。

「いいよ。なら、拓人がゲイを嫌う理由を教えてくれないか。納得できたら、俺もキミを誘うのはやめるよ。俺は同性愛もひとつの恋愛だと思うな。場合によっては、男女の恋愛より辛(つらい)かもしれない。そんな恋愛、俺は演じてみたいよ」

同性愛もひとつの恋愛。男女の恋愛より辛いかもしれない。

……言葉がでてこなかった。恵さんは俺の感情も否定する前に理解しようとしてくれるけど、自分の軽率さに気づいたいまは、責められている気分だったからだ。

同性愛の恋愛の痛みなんて、全然想像していなかった。

「人間はみんな同じじゃないからいいんだよ、拓人」

恵さんの言葉が、俺自身のちっぽけさを明確にする。

唇を噛んで言葉を殺した。悔(くや)しかった。自分がばかすぎて、情けなくて。こんなところまで乗りこんできて愚(おろ)かさを晒(さら)したのかと思ったら、余計にいたたまれなくなってきた。

「ごめんなさい……」

呆(あき)れられてしまっただろうか。不安になって顔をあげると、恵さんは煙草を唇から離して微笑み返してくれる。俺の心に再び疑問が浮かんだ。

「恵さん、俺みたいなガキを、どうして相手役なんかにかに、」

「言ったでしょう、顔が好きだからだよ」

「でも、幻滅してもういやになったんじゃないですか？」

にんまりと悪そうな顔になった恵さんが、右手で顎(あご)を擦(こす)りだす。

「な、なんですか、その顔……」

「いんや。なんてこたえようかなあと思ってね……」

……ぬっ。なにそれ。

「拓人を初めて見たのは、街のビルにあった大きな看板だったよ。黒いタートルネックの裾(すそ)を啜(くわ)えて、上目づかいで睨(にら)んでるやつ」

ああ、初めてファッション誌の表紙になった写真だ。

忘れもしない。雑誌の顔になるほど成長できたのが嬉しくて、それまで支えてくれた人たちに恩を返すためにも、気合を入れて挑んだ一枚。

「それが……？」

「あの瞳に惹かれたんだよ。人の心を見透かすような、あの強い瞳に。……で、今回の仕事を依頼されてから思った。いまのキミのモデルとしてのポジションを考えても、ドラマにでるのはいいタイミングなんじゃないか、とね。それで俺も男だし、キスもベッドシーンもあるなら好みの子がいいなあ、と」

キスとかは、ともかく……俺はまた驚いた。

「恵さん、俺のこと気にとめてくれてたんですか？」

「知らない子を指名するわけないだろ」

嘘(うそ)みたいだ。“惹かれた”って？ 恵さんが？  
狼狽(うろた)える俺を感(かん)慨(がい)深げに眺めながら、恵さんは俺の後頭部に  
右の掌(てのひら)をのばしてそっと覆い、  
「ずっと前から好きだったよ。今日会いにきてくれたのも嬉しかった」  
と、言ってくれた。  
……胸がざわざわする。心が幸福感に騒ぐ。いますぐこの喜びを返さなくては、と俺  
も衝動的に告白した。  
「同じです。俺も、恵さんに憧れてましたっ」  
恵さんは、お、というふうに目をまるめる。  
「そうなの？」  
「はい。身長が高くて目がきれいで、指も細長くて、全体的にスマートなのに適度に筋  
肉がついてて、恵さんの身体のラインに憧れてたんです」  
「からだ？」  
「テレビとか雑誌も、たまに見てました。モデルとして恵さんのボディラインが気になっ  
たのもあるけど、でも、単純に顔とかも、好きで……」  
は。  
し、しまった。調子に乗ってしゃべりすぎた。しかも身体と顔が好きって、恵さんが俺  
にくれたのより強烈な告白じゃないか。  
真っ赤になってちぢこまったら、にやにや笑って覗(のぞ)きこまれた。  
「じゃあ、ベッドシーンも問題なくできるね」  
あぐ、とくちを嚙(つく)む。吹きだした恵さんは、笑いながら俺の後頭部にあった手で  
さり気なく髪を撫でて、さらりと離す。  
心地いい温度と、安(あん)堵(ど)感(かん)。  
恥ずかしかったけど、くちから無意識に告白の言葉がでるぐらい、この人を好きだっ  
たのは本当だ。この手に触れられるなら嫌じゃないかもしれない。それどころかきれい  
なかたちとぬくもりに興奮しそうだ。  
ドラマか……。

本文 p24～30 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>